

会話をする

かいわ

埼玉県立戸田翔陽高等学校 一年

石渡那美

私には、耳が聞こえない聴覚障害をもった大叔母がいます。彼女は「先天性難聴」であり、生まれたときから音が聞こえないそうです。母は大叔母のこども、母からするといとこにあたりますが、歳が近かったこともあり、小さい頃は大叔母の家に泊まりに行ったりしていたそうです。母の話によると、大叔母が耳が聞こえないと判明したのは赤ちゃんの頃だったそうですが、六十年ほど前のことで、今ほど医学が発達しておらず、発見されたのは大分後だったそうです。現代でも耳が聞こえないと診断されたら、大変な戸惑いと不安があると思いますが、当時はもつと大変だったのではないかと思います。

そんな大叔母とこの夏、法事のため会う機会がありました。私は小さい頃、何度か会った事があるのですが、記憶にはあまりないため私にとっては初めて会うような感覚でした。会うにあたって、とても不安になりました。耳が聞こえない人との様にコミュニケーションを取ったら良

弊があるかもしれないかもしれませんが、私にはそれくらい母と大叔母が自然なコミュニケーションを取っているように見えたのでした。何故そう見えたのか、様子を見てみると、手話が完璧に出来なくても、話したいことがある時は肩を叩いて知らせ、身振り手振りのジェスチャーをしたり、大きな口を開けてはつきり、ゆっくりと話すこと。これは口話という方法だと後で知りました。他にも筆談、今はスマートフォンなどの文字を打てる物があるので、紙に書く筆談よりも速く相手に話したい事を伝えることもできます。そんな母や、母の姉と大叔母の様子を見ていたら、コミュニケーションを取る為に必要な事は決まった方法ではなく、

相手に伝えたいという心^①が大事なのだと思います。そう思った私は大叔母ともつと話してみたくになりました。でも何を話そう、そう考えて大叔母の事を見ていると、本当に笑顔の絶えない明るい人だなと思いました。母に聞いた話だと、友人が多く、若い頃は車が好きて7人乗りの大きな車で北から南まで、全国にいる友人に会いに行ったりしていたそうです。その話を聞いて、私はまた驚きました。耳が聞こえない人は車の運転なんて出来ないだろうと勝手に思い込んでいたからです。ですが、耳が聞こえない事以外は私と変わらないんだと知りました。

人は一人一人違って、沢山の個性がある。障害もその一つであること。相手を知ろうとする心が大切で、どんな事

いのか分からなかったからです。手話を少し調べてみましたが難しく、とても一朝一夕で覚えられるものではないと思いました。それでも、挨拶くらいはと思い、「こんにちは」と「さようなら」、それと「ありがとう」は覚えようと練習しました。法事の当日、大叔母の姿を見ると、とても緊張しました。それでもせっかくなので挨拶の手話を覚えたのだからと、実践してみました。これで通じるのだろうかどキドキしました。大叔母は笑顔で手話の挨拶を返してくれました。とても嬉しかったです。けれど、その後はどうしてよいか分からずその場を離れてしまいました。手話が通じたことよろこびと同時に、もつと他の手話も覚えてきたら良かったなとも思いました。しかし、私はその後の母や、母の姉の姿を見て驚きました。母や、母の姉は手話を勉強したことはないそうです。普段から聴覚障害のある人と接しているわけでもありません。それでも久しぶりに再会した大叔母と会話をしているではありませんか。会話という語

に楽しさを感じ、逆にどんな事が嫌だと感じるのか。障害がある人もない人も「普通」という偏見の壁を取り外せば、もつと沢山の輪が生まれるのではないかと思います。今回は挨拶だけで終わってしまった大叔母の事も次会う時はもつとコミュニケーションを取ってみようと思います。

誰もが偏見を持たない社会へ

愛媛県立川之石高等学校 二年

井上聖陽

幼い頃の私は障がいがある人はかわいそうだと思っていました。目が見えない、耳が聞こえない人はかわいそう、手足が動かない人はかわいそう、というように。身体障がい者だけでなく、知的障がいや精神障がい、発達障がいがある人たちも、なんとなく上手く話ができずかわいそうだと思っていました。

中学生になってから、障がいがある人と実際に関わることでありましたが、その時も、障がいがあると大変そうで、かわいそうだから、優しくしてあげないといけないという考え方でした。私がそうだったように、障がいのある人に対してイメージは「かわいそう」や「優しくしなければ」などという考え方を持っている人もいるかもしれません。しかしその考え方は間違っていました。

私は介護福祉士の国家資格を取得するために、福祉系の高校に通っており、高校一年次の冬、初めて四日間介護実習に行きました。八幡浜市の障がい者施設に行かせていた

だいたのですが、この施設は、障がいがある人の就労や日常生活を支援する施設でした。実習の内容は利用者さんの活動の見守りをしながら、コミュニケーションを取るというものでした。私は、初めて知的障がいのある人と関わることになりました。

実習を行うフロアに行くと、突然大きな声を出す方や、急に走り出す方がいてどのように接したらよいのか分からず途方に暮れ、何もできずただ立って見ていることしかできませんでした。そんな時、

「ニュースや天気などの簡単なことから話をしてみるといいよ。」

と指導者の方から教えていただきました。勇気を出して、「明日は雪が降るそうですよ。」

と話しかけると、利用者さんが笑顔で、「そうですか。うちは山やけん雪が積もってしまうんですよ。」

と答えてくれました。そこから、学校での生活の事や部活動の事などを話していくと、少しずつ緊張がほぐれ、コミュニケーションが取れるようになっていきました。

また施設では毎日レクリエーションがあり、その日は利用者さんと一緒にパズルをすることにしました。パズルを前に、利用者さんが困っている様子だったので、少しだけヒントを伝えてみると、

「ああそういうことですか。」

と言いなながらパズルを完成させることができました。利用者さんから「ありがとうございます」と丁寧にお礼を言われると、なんだかうれいような恥ずかしいような気持ちになりました。私はこの時まで知的障がいのある方は、思ったことをうまく伝えられないとか、理解をするのが難しいというイメージを持っていました。でも実際はそうではなかったのです。こちらが分かりやすく説明をするだけで、自分で楽々とパズルを完成させることも自分の気持ちで正確に伝えることもできるのだということに気が付きました。

実習開始から数日が経過し、徐々にまわりを見る余裕もできてきました。ある時、一人の利用者さんが急にどこかへ行ってしまおうということがありました。しばらくすると職員さんと一緒に何もなかったかのように、ニコニコしながら戻って来られて、職員の方をととても信頼しているよう

に見えました。この時、職員の方はただ優しくするのはなく、特別扱いせずに、安全を守るための方法を丁寧に話され、ずっと寄り添っておられました。利用者さんは職員の方のことを信頼されていると感じました。

これらの事を通じて、障がいのある人は特別でかわいそう、優しくしないといけないという考え方が間違いだと思ってきました。障がいがあるという先入観で、できないことがあると考えてしまっていました。実際は丁寧に説明をしたり、ちょっとしたヒントを伝えたりすることで、私たちと同じように生活することができるのだと思いました。実際に実習後半になると、利用者さんから声をかけていただけのほど仲良くなり、楽しくコミュニケーションが取れるようになりました。障がいがあるとできないことがあるという決めつけをしていた自分を恥ずかしいと思いました。

この介護実習を通して、私は少し成長できたと思います。障がいのある人となない人を区別しない、障がいのある人もない人と同じように、一人ひとりに違いがあります。しかし、私がそうだったように障がい者に対して、間違った認識を持っている人もいます。障がいについてみんなが正しく理解し、障がいがあってもなくても、自分らしく充実した生活ができる共生社会を作っていきたいと思えます。そのために今私にできることは、もっと福祉

について学び、障がいについて正しい理解を深めていくことだと思えます。これからは、地域の行事やボランティア活動などにも積極的に参加し、障がいがある方とコミュニケーションをとったり、一緒に作業をしたりして、関わっていただけるようにしたいです。

見えない障がいと向き合う

学習院女子高等学校一年
進藤 璃子

私は小学三年生の時から右耳に難聴を持っています。左耳には全く異常がないため当初は日常生活に殆ど支障はありませんでした。また自分の難聴について基本的に人に言わないようにしていたので、他人から配慮されることなく、所謂健常者と同じ生活を送ることが出来ていました。人に言わないようにしていたことには理由があります。一つは、視力が良くないというのはよくあることだけれど聴力が良くない人は特に子供ではあまり居ないのでやはり特別視されてしまうと思つたからです。もう一つの理由は小学校で親しかつた友人に話してみたところその子に軽くネタにされてしまったため若干のトラウマになったからです。そのようなこともあり中学以降は仲が良くてもどんなに近くても話さないと決めていました。

中学生になつてクラスの人数が増え、四方八方から話しかけられることが多くなると、主に左耳しか使えないが為に音の距離や方向が分からずどここの誰から呼ばれたのか

いのです。けれども「あの子は話しかけても返事をしない」「人の話を聞いてない」「上下関係や友人関係が小学校に比べ複雑な中で、そんな風に周りから思われていたらと思うと日に日に怖さが増していきました。挙げ句の果てには聞き取れなかったことを聞き返すことも、頻度が高すぎて変に思われたら嫌で出来なくなっていました。恐怖が限界に達し、中一の時泣く泣く親に打ち明ける決意をしました。部活顧問と担任の先生にもお話をし、今後について一緒に考えて下さいました。どちらの大人と話した時も、「周りに困っていることをきちんと話した方が良いのでは？」と言われてしまいました。一番自分がしたく無かつたことだけたけれど、人間関係上特に困っていた部活の方は中高一貫校の為引退まで数年いることになるので、部員もわかつていた方がお互いに安心なのでは？という流れになりお話ししておくことになりました。話すタイミングがなかつたりしたけれど、最終的には部員には困っていることを自分の口で言うことができました。今まで徹底的に隠していたことを人に話すのはやはりとても怖かつたです。皆を驚かせてしまった上色々な人を困らせたと思うけれど、その後部員から私への当たり方が変わることはありませんでしたし、助けてもらったこともありました。中には「話してくれてありがとう」と言ってくれた人もいたので安心してました。

分からなかったり、人の声と物音を聞き分けられなかつたり、話しかけられても気付かなかつたり、声が途切れ途切りに聞こえて何度も聞き返してしまつたり、幾つもの支障を感じるようになりました。私は小学生の頃、お医者さんに「今は生活に支障が無くても、大きくなるにつれて困ることが出てくるかもしれない。困ることが出てきたらきちんと相談すること。」と言われていました。どうやら、中学生になつてその時が来てしまつたようです。

私はすぐに親や先生に相談することはできませんでした。自分が配慮されるようになって、障がいのある者として他人に扱われるようになって、障がいのある者としてまでは自分の難聴が「見えない障がい」であることに助けられてきました。例えば白杖をついていたら目に障がいがあるということが分かるけれど、当時の私は補聴器など付けていなかつたので見かけで耳に障がいがあることは分かりません。何も言わなければ誰にも気づかれることはな

これらをきつかけに病院で検査をしたところ、小学生の頃よりも聴力が落ちていたことが分かりました。それが分かつた時、もう少し早く早く勇気を出して親に伝えていれば悪化せずに済んだかもしれないと思い、本当に後悔しました。診察中暗い顔をしていたところ、お医者さんに補聴器を使ってみることを勧められました。私は中学生で補聴器を付けている子なんて周りにいないし、周りの人と少し違う見た目になることに抵抗を感じていました。そして何より「見える障がい」になつてしまうことが嫌でした。躊躇いしつつも中三の夏休みから使ってみましたところ、耳に物が入り続けているのに慣れるのには時間がかかつたけれど、言葉が解らなくても音の方向や呼ばれているのに気付けるようになりました。

「すれ違いざまに変な目でみられるのでは？」という不安を持ちつつも迎えた新学期。しかし自分が鈍感なのか、気遣われているのか分からないけれど、指摘してくる子は殆どいなかつたことに驚きました。あるいは自然と皆に私の特徴を受け入れられているのかもしれない。中には「なんでそんなの付けてるの？」と聞いてきた子もいたけれど、私はそれを全く不快に感じませんでした。理由を説明して相手が納得した表情をしてくれると、私もとても安心してることができました。他人から知られることを恐れるよりも、知って理解してもらおうことが私にとっては楽になれ

る方法なのだ学びました。

「見えない障がい」、あるいは病気に悩む人は世の中少な
くないと思います。そのような方々に私は伝えたいことが
あります。周りに知られないということは特別な扱いや待
遇を受けない、健常者と見かけは同じように生活できる
というメリットがあります。しかしその一方で困ったときに
周りに助けを求めるのが困難になり、人から隠すというこ
とが自分の中で定着してしまうと私のように悪化するな
ど取り返しのつかないことになってしまうこともあります。
す。もしも困ったときには、怖いかもしれないけれど限界
が来る前に誰かに助けを求めて欲しいです。理解してくれ
る人は必ずいます。それを私は身を持って分かりました。
今回このような作文を書いたのは、私以外にもいるかもし
れない、自分のことをオープンにするのが怖いと感じてし
まう人がいるということを誰かに知って欲しかったから
です。遅くなってしまうとしても、勇気を出して打ち明
けてくれた人を責めたりはしないでください。私は「教え
てくれてありがとう」が言える人として、個人個人の感じ
るどんな困難や苦しみも受け入れ支えたいし、そういう人
と思ってもらえるようになりたいです。

ひとりで苦しんでしまう人が、一人でも少なくなります
ように。

思いやりが社会しゃかいを変えるか

田た中なか裕ゆう子こ
関西創価高等学校一年

私はある日、ひとりの女性が片手に杖を、片手にホワイトボードを持って立ち止まっているのを見かけた。ホワイトボードには赤い字で「SOS！私は目が見えません！点字ブロックが何かでふさがれているので助けてください」と書いてあった。女性の足元に目をやると、女性の持つ杖が、点字ブロックの上のつたトラックのタイヤをついているのが見えた。女性の周囲にはたくさんの人が歩いていたが、見て見ぬふりをするどころか全く気づいていないようにすら見えた。トラックの作業員、多くの通行人の無関心に驚きつつ、「見なかったことにして通り過ぎる」という選択肢が一瞬だけ頭をよぎった自分を恥じた。あまりに多くの人が無視していたため、困っている人を助けるという行為が間違っているように思えた。だが、私は勇気を出してその女性に声をかけた。行き先をたずね、点字ブロックがある場所まで手を引いていった。その時、女性はくるつと後ろを振り向いて「ここにトラックを停めないで

ください。私のような人が困ります。」と作業員に向かって言った。この女性は自分の意志を主張できる強い人なのだと感じた。周りの雰囲気の流れに流された自分とは大違いだ。

それはたった数分の出来事だったが、私の心は大きく動かされた。同時に、視覚障がいについて、ほとんど深く考えたことがないことに気づいた。そこで私は、自分の中の無関心を打ち破るべく、目が不自由な人々にとって、どんな状況が困るのか、その状況でどういった補助があると便利なのかを調べてみることにした。あの女性が持っていた杖は白杖といい、路面状態や障害物を事前に察知するために必要なこと。点字ブロックの近くに看板や木の枝が飛び出していたら危ないこと。盲導犬に食べ物を与えられたり、撫で回されたりすると困るということ。食事の際は、食べ物の配置を詳しく教えてほしいということどれも私たちの思いやりひとつでできることだった。「障がいを持つ人

も生きやすい街」づくりのカギは私たちの関心と思いやりにあるのだ。障がい者を支援する法や体制、設備を整えることはもちろん大切だと思う。しかし、人々のなかに困っている人を見逃さない意識が根付かない限り、本当の「共生社会」の実現はできないのではないだろうか。

しかし、私は障がいを持つ人への思いやりを持つことと、障がいを持つ人を特別視することは別物であると思う。無意識のうちに「障がい者は助けてあげなければいけない存在」だと思っている人は少なくないように感じるが、決してそうではないと思う。障がい者は無力ではないし、無力だと決めつけることにこそ差別の原因があるのではないだろうか。たとえ障がいを持っていても、持っている人のようにできることもある。障がい者に対して、全くの無関心でいるのではなく、すべてのことに手を出すわけではなく、困っているときにさりげなく手を差し伸べられる。そういう人になりたいし、そんな人が増えればいいなと思う。あの日出会った女性のおかげで、障がいを持つ人との向き合い方について考えることができた。彼女のよう
 うに困る人がひとりでも減るよう、自分の身近なところからこの体験を広めていきたい。

優先席ってだれのもの？

ゆうせんせき

山梨英和高等学校二年
みやざわ ゆずき
宮沢 妃

「心の輪」

その言葉は、人と人の心を繋いでいることを意味する言葉。私たちが生きていく今の時代は、インターネットが発達したことの影響として、心ない言葉が日常的にSNS上で飛び交っている。また、インターネットが発達する以前も口頭で罵詈雑言を浴びせられた人もいたのではないだろうか。

「何故、そのようなことを言っている人がいるのだろうか。」

と、日々このようなことを思いながら私は過ごしている。

ある日、学校帰りに持病の影響で体調が悪く、優先席に座っていると、攻撃的な視線で見てくる大人がいた。いや、ひとりだけではない。同じ車両の中にいるほとんどの人が私を見ている。私が乗車した電車は多くの人が乗車していて、席が空いていなかった。しかし、体調の悪かった私はどこでもいいから席に座りたいという気持ちで、空いていた

私は指定難病にも登録されている混合性結合組織病を患っている。見た目は、健康体そのものだが、内面の病気なので理解されないことが多い。だからこそ、見た目だけで判断しないで欲しいと思う。

最後に、東京に遊びに行ったとき、電車内で席を譲っていた光景を目の当たりにした。席を譲ってもらっていた人は見た目は若い人が、杖をついて歩いていた。その場に居合わせた女性たちは、

「席どうぞ」

と声をかけていた。杖をついていた女性は、

「次の駅で降りるので大丈夫ですよ。」

声をかけてくれてありがとうございます。」

と言っていたが、女性たちは無言で席を立ち、ジェスチャーで「どうぞ」と合図をしていた。この出来事に関わった人々は女性が降りるまで終始笑顔だった。お互いに気持ちの良い関係を築けるのはいいなと隣で見ていて感じた。何度もこのような場面に遭遇した私は、「心の輪」を広げられるような人になりたいと思った。気持ちのいい行動や見た目で判断しないこと、誰かが聞いて不快になるような言葉を言わない場所、世界になって欲しいと私は願う。

優先席に座った。優先席付近に立っていた私と同じ高校生たちが私を見ながらコソコソと何かを話していた。

「なんで高校生が座ってんの。」

「優先席は普通の席ではないのにな。」

「私たちも座りたいな。」

私は、話している内容が聞こえてしまい、悲しい気持ちになった。席から離れ、二駅先が最寄りだからというマインドで手すりをつかんでそのような出来事をやりすごしたことがあった。私も高校生たちの意見を理解していたからこそ、優先席から離れるという行動を起こしたのではないかと今でも思う。

「優先席」は一般的に交通弱者と呼ばれる高齢者や障害者、傷病者、妊婦、ベビーカーを含む乳幼児連れの人などを対象とした福祉的目的で設置された席である。見た目は健康そうに見えても、内臓に病気を持っていたり、精神的な病気を持っていたりする人もいる。私も前者の中の人だ。